社会科

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-06-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00066567

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

社　会　科

大塚　有将
岡田　哲典
金田　哲也
共同研究者　加藤　隆弘（金沢大学）

１．Society5.0 に向けた教育を進めるに当たって

（１）Society5.0 について

内閣府によれば Society5.0 とは，「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより，経済発展と社会的課題の解決を両立する，人間中心の社会（Society5.0）」であり，「狩猟社会（Society1.0），農耕社会（Society2.0），工業社会（Society 3.0），情報社会（Society4.0）に続く，新たな社会を指すもの」1)とされる。では一体その社会はどういった社会なのか，日本の政府や各団体が示しているものからその姿を捉える必要がある。

まず，この未来の社会の姿について初めて言及されたのが，政府が策定する「10 年先を見通した５年間の科学技術の振興に関する総合的な計画」(平成 28 年１月 22 日「第５期科学技術基本計画」）であり，そこでは「超スマート社会（Society5.0）」として説明されている。「必要なもの・サービスを，必要な人に，必要な時に，必要なだけ提供し，社会の様々なニーズにきめ細かに対応でき，あらゆる人が質の高いサービスを受けられ，年齢，性別，地域，言語といった様々な違いを乗り越え，活き活きと快適に暮らすことのできる社会」と述べられている。それが内閣府が定義した Society5.0 の「人間中心の社会」に該当するものである。また，経済発展への課題として，単なる大量生産の画一化された工業製品は，他の人件費の安い新興国に値段の上で太刀打ちができなくなってきている現状は経済産業界では知られていることである 2)。しかし，「超スマート社会」の考える通り，コスト削減と高品質を維持しながら一人一人に合ったサービスや財を提供することができれば，新興国の工業とは異なる価値を生み出すことができる可能性が広がる。また，コストや資源のロスを減らしながら，様々な社会的諸課題にも，様々な能力を持つ人間が様々なニーズを持つ人々と漏れ無くつながることで解消される可能性を持っている。これらを「仮想空間と現実空間を高度に融合させたシステム」で実現していく，というイメージであろうと考えることができる。

（２）Society5.0 に向かう教育の在り方について

この未来の社会への考え方を受けて，文部科学省では Society5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会で「Society5.0 に向けた人材育成～社会が変わる，学びが変わる～」をまとめ，また，経済産業省も『「未来の教室」と EdTech 研究会第一次提言』において教育について述べ，両者に共通して今後重視されるべき方向性が「(公正に）個別最適化された学び」であるとしている。

「個別最適化」とは文部科学省の大臣懇談会においては，「児童生徒一人一人の能力や適性に応じて」最適化することを示し，経済産業省の「未来の教室」においても「子ども達一人一人の個性や特徴，そして興味関心や学習の到達度も異なることを前提にして，各自にとって最適」であることを示している。これらはまさに先述の目指すべき社会の姿である「超スマート社会」の様子であることが分かる。つまり Society5.0 の社会を目指す教育を進めるに当たって最も大切な考え方の一つが「個別最適化された学び」を得る機会をどのように生み出すか，ということになる。

しかし，そのような社会の実現にはその「人間中心」「人道的」な考え方と手段を良しとする考え方を多くの人が持つことが必要だが，それを実現する技術やサービスの発展もまた不可欠である。そして教育においてはその根底に「多様性の尊重」があることは欠かしてはならない視点であると考える 3)。

また，文部科学省は「(公正に) 個別最適化された学び」以外に２つ取り組むべき方向性を示している。その一つが「基礎的読解力，数学的思考力などの基盤的な学力や情報活用能力をすべての児童生徒が習得」することである。

「読解力」や「情報活用能力」は，Society5.0 時代において AI や高速通信によりビッグデータを誰もが扱い，情報処理は AI がアルゴリズムに応じて学習していくからこそ，人間の強みであるコンテクストなどを踏まえた読解力や思考力，情報をどのように活用するかという点を伸ばす必要があるということだろうと考えられる。さらに，AI には意思が存在しないし課題意識も無く，一見すると関連性のない情報を関連付けて新たな価値を生み出すこともできない。人間の強みはそのような「読解力」や「情報活用能力」にこそあると考えられる。

（３）Society5.0 を目指す学校教育

ここまで述べたように，課題を見つけ，知識や情報を活用し論理的に思考して解決策を見いだすという営みこそ人間の強みである。そしてその力はそれが求められる状況になってこそ発揮され，育成されると考えられる。

つまり，今後の教育で今まで以上に求められるのは，来るべき超スマート社会（Society5.0）において，多様性を尊重する前提の上に，その多様な人々に個別最適化された学びを保証すること。そして実際に課題を解決していく取り組みを通して，情報や知識を活用し，多様な社会的課題を論理的に解決できる力を育成することと考えられる。

また，本校の学校教育目標において，「将来，社会的使命を果たす生徒」の育成を掲げており，目指す生徒像として第一に「自ら考え学び，創造する生徒」を挙げている。よって Society5.0 の社会のイメージを共有し，その社会において自らの「社会的使命」を果たす生徒を育成することを目指すことは学校教育目標から見ても，必要な方向性である。

以上のことを実現していくにあたって，学校現場ではどのように考えていくべきなのか。Society5.0 に向けての教育に関して，平成 31 年４月 17 日文部科学省の「新しい時代の初等中等教育の在り方について（諮問）の概要」が出されている。そこでは Society5.0 時代の教育・学校・教師の在り方として，下記のような力が育成されることが必要だとしている。「①読解力や情報活用能力，②教科固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力，③対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力等」の大きく分けて３つである。

ここでは②のように従前の教科の学びを生かし，③にあるように対話・協働を基に新しい解・納得解を生み出すことが必要であるとしている。ここから考えても課題を解決し，解を得るための活動の中で，様々な力を身に付けていくことを重視されていることがわかる。

ここで，社会科という教科で，Society5.0 の社会における教育を考える。学習指導要領（平成 29 年告示）社会科編の目標にある「社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して」「公民としての資質・能力の基礎を」育成することは，先述の①②③の実現に向かっていくことと矛盾せず，共通する点が多い。社会科の目標を目指すことは Society5.0 の社会における教育と当然ながら同じ方向を向いている。しかしながら，学習指導要領（平成 29 年告示）

解説で平成 20 年改訂学習指導要領における課題で挙げられた通り，課題の解決を行う学習において，現実の社会や自分自身の身の回りの問題とは距離がある場合も多く，十分ではないとされている。

課題の解決という視点において，本校では平成 14 年から「21 世紀を担う生徒の育成を目指して」という研究主題で「問題解決力」の育成に取り組んできた。その中で，社会科は「思考力，判断力，表現力」の育成に重点を置き，「問題解決力」の育成に寄与してきた。その研究でも問題解決はどのような力から成るのかを分析していた。しかし，これまでの研究での「問題解決力」については，先述してきた Society5.0 に向けて育成を図った資質・能力ではなく，様々な問題解決に必要な力をあくまでそれぞれの教科で育成する研究実践であった。

前年度より，本校では Society5.0 の教育に向けて，教科等横断的に問題解決を図る STEAM 教育の考え方を取り入れ，研究を行ってきた。社会科の見方・考え方でのみの問題解決ではなく，さらに様々な分野に関連する問題解決を図ることで，より現実の社会で必要とされる力を育成することを目指している。

（４）本校研究における社会科

STEAM 教育における学習指導としては，STEAM 領域の学習を現実社会での課題解決に生かした学習内容の実践が求められる。そして，「現実社会の課題」は，様々な要因が複雑に関わり合っているため，一つの教科の知識や技能を習得しておけば解決できるような課題ではないことから，教科横断的な学習内容を実践する必要があると考えられている。本校では，複数の STEAM 領域の知識と技能や見方・考え方を働かせて，現実社会の課題を解決する学習内容の実践を計画的に行なっていくことを目指している。

ここで社会科の果たす役割を考えたときに，着目すべきは「現実社会の課題」を解決する実践という点である。現実社会の課題の解決において「社会的な見方・考え方を働かせ」ることは非常に重要であり，その上で，「課題を追究したり解決したりする活動を通して」，「公民としての資質・能力の基礎を」育成することを目標とする社会科はプラットフォーム的な役割を果たすことができるのではないかと考える。

前年度は，社会科の授業の中で，他教科の知識・技能や見方・考え方と関連するプロジェクトを立ち上げて課題解決を図る授業を行った。しかし，授業後に取った生徒のアンケート結果によると，生徒は社会科を「非常に実社会と関連の高い教科」と見ながらも，「社会科が他の教科と関連していると感じているか」という点においては「実社会との関連」の項目に比べると低い傾向を示した。これは社会科の教科のみにおいて，他教科との関連があるであろう課題解決型学習を取り入れることのみでは，他教科の見方・考え方の活用に不足があることに原因があると考えられる。

そこで，今年度は**他教科と共にプロジェクトを立ち上げ**，課題解決型の授業実践を行う。そして「Society5.0 を主体的に生きるための資質・能力」という新たな見方を持って，それらの資質・能力を育成するにはどのような実践がより効果的か，模索・検討していくこととする。

２．資質・能力の育成に当たって

（１）教科等として育成する資質・能力について

学習指導要領社会編によると，社会科の目標は資質・能力の３つの柱に沿って以下の通り設定されている。

> 社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。
>
> (1) 我が国の国土と歴史，現代の政治，経済，国際関係等に関して理解するとともに，調査や諸資料から様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
>
> (2) 社会的事象の意味や意義，特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり，社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断したりする力，思考・判断したことを説明したり，それらを基に議論したりする力を養う。
>
> (3) 社会的事象について，よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の国土や歴史に対する愛情，国民主権を担う公民として，自国を愛し，その平和と繁栄を図ることや，他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。　※下線は筆者による

上記の社会科の目標は資質・能力の３つの柱に沿って設定されており，その資質・能力と本校が定めた「Society5.0 を主体的に生きるための資質・能力（表１）」との間で特に関連が深いと考えたのは以下の６つである。

①「持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」

社会科の目標の「よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養う」と関連が深い。

②「多様性の尊重」

目標における「他国や他国の文化を尊重することの大切さ」と関連が深い。

③「文章や情報を読み解く力」

目標における「調査や諸資料から様々な情報を効果的に調べまとめる技能」に含まれる。

④「対話する力」　⑤「論理的思考」

目標における「選択・判断したりする力，思考・判断したことを説明したり，それらを基に議論したりする力を養う」に含まれる。

⑥「批判的思考」

批判的思考とは証拠に基づく論理的で偏りのない思考のことである。多面的，客観的にとらえることで批判的思考が可能になる。よって，「多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の国土や歴史に対する愛情，国民主権を担う公民として，自国を愛し，その平和と繁栄を図ること」に含まれる。

表１　本校が定める Society5.0 を主体的に生きるための資質・能力とその定義

	本校が定める Society5.0 を 主体的に生きるための資質・能力	定義
1	デザイン思考	問題解決の思考法の一つ。対象とする問題を解決するために，認識されていない内なる課題を見出し，それを解決するための最適な手立てを考えていく思考法。
2	イノベーターのマインドセット	「既存の考えに捉われることなく，斬新な発想を歓迎し，失敗してもいいからひとまずやってみる。」，「自分には，周囲の世界を変える力がある。自分には，何かを生み出し，実行する力がある。」など，イノベーターが有している態度。
3	より良く生きようとする態度	自己実現や理想の社会に向かおうとする態度。
4	多様性の尊重	性別・国籍・人種・年齢など様々な違いを問わず，人の多様な意見や習慣，好みを大切に扱おうとする態度。
5	実体験を通じて醸成される感性	自然体験や本物に触れるなど，実際に体験することで養われる感受性。
6	文章や情報を読み解く力	文章や情報を理解し，必要となる内容を見出すための力。
7	持続可能な社会を志向する倫理観・価値観	自分の行動が持続可能な社会を作っていくという意識。
8	対話する力	考えを広めたり，深めたりするための対話をする力。（対象は，他者，自分自身，もの）
9	論理的思考	根拠を定め，前提と結論が整合的（無矛盾）であるかを問い続ける思考法。
10	批判的思考	ものごとを批判あるいは懐疑をもって捉え，より深く理解するために，問題や前提は何か，多面的・多角的に問い続ける思考法。

（２）関連・連携を図った教科等について

社会科で目標とする身に付けさせたい資質・能力は Society5.0 の社会においても必要とされる資質・能力と共通する要素が多いことはここまで述べてきた通りである。

よって本校研究において社会科が重要とするべきなのは，以下の 3 点であり，それらを意識した実践を行った。

①　課題解決型の学習であること

②　課題解決を教科等横断で行うこと

③　課題解決へのプロジェクトを立ち上げ，プロトタイプ（試作品）を作る活動であること

以上を踏まえ，実践例を紹介する。

１年生　「祈りと願いの企画展」

Ａ．プロジェクト内容

第 38 回（令和５年度）国民文化祭が石川県で開催される。新型コロナウイルスの脅威によって，観光業・飲食業のみならず様々な社会活動が制限されている昨今，石川県の地域の文化資源等の特色を生かした文化の祭典に寄与して，石川県をより盛り上げることができないだろうか。そういう問題提起から，石川県や日本の文化財と中学生の作品をある一つのテーマで集め，展示する企画展

をつくるプロジェクトを立ち上げる。

B．社会科で身に付けさせたい資質・能力と各教科等との関連・連携

このプロジェクトでは社会科の歴史的分野において，文化はその時代の世相を反映しているという視点で見ること，そしてその文化における代表作や文化財の作成に携わったものにはその時代の状況における願いや祈りがあることに気付かせること。

また，美術科では美術科の技能を用い，生徒自身の願いや祈りを表現し，国語科では生徒自身が自らの作品の願いや祈りと，共感したり紹介したいと思えた歴史的文化財の紹介文をまとめる。

C．教科等横断的プロジェクト作成にあたって

社会科での STEAM 教育を実践するためのプロジェクトにおいては，地理的分野・公民的分野の実践を行ってきたが，歴史的分野においては実践が図れていなかった。しかし，これからの地方が活性化していくには観光資源となる文化の重要性は放置できない。石川県や金沢の文化と言われたときに生徒が思い浮かぶことの多くが伝統文化に関連することであった。

そこで，石川県や日本の伝統文化を紹介し，社会科の見方・考え方を使って一つのテーマを設定する展覧会を企画してはどうかと考えた。しかし，これでは社会科の授業の中だけで，リアリティーのないものとなる。そこで美術科の教員と相談したところ，美術科においてそれらの伝統文化の一部の技能を学び，生徒自身が作品を作るというプロジェクトにつながった。そこで，テーマを設定し，文化とそれを代表する文化財・作品には歴史的な背景があり，それらの背景と製作者の願いがあって制作されて広がり，文化となる。そのような社会的事象の背景を読み取るという社会科の見方・考え方を育成することにも寄与すると考え作成したプロジェクトである。

２年生　「15 秒で分かる石川県」

A．プロジェクト内容

石川県の地域的な特徴や産業の特色などについて調べ，石川県の魅力を発信する。社会科では，プロジェクトの前半部を担い，テーマ設定や情報収集，新聞にまとめるまでを行う。単元の導入では，石川県の新たな魅力の発見を目的として，ホームページや既存の観光情報に囚われない情報収集を行いたい。中学生だからこそ伝えられる地元の良さや，面白いポイントを探すことを狙う。

プロジェクト後半部は，国語が担当し，15 秒で石川県の魅力を伝えるための情報の精選や，印象的なスライドの作成を行う。

B．社会科で身に付けさせたい資質・能力と各教科等との関連・連携

社会科では，多面的・多角的な考察を通して，これからの地域の在り方や，現在の課題に対して具体的な活動に向かう態度を養いたい。また，観光に力を入れている石川県であるが故に，情報が氾濫しており，生徒たちには，情報を取捨選択する能力や，新しさを生み出す能力の育成を求めていきたい。

持続可能な地域社会の在り方を思考し，実社会に向けて発信しようとするとき，情報の受け手に強く印象を与える方法が必要だと考えた。そのため，国語科がプロジェクトの後半を担当し，15 秒で石川県の魅力を伝えるためのバナー広告の作成を行い，成果物として発信し，受け手からフィードバックや評価を受けることまでを一連のプロジェクトとして行う。

C．教科等横断的プロジェクト作成に当たって

国語科で育成したい資質能力の中には，「目的や場面に応じて，社会生活の中から話題を決め，異なる立場や考えを想定しながら集めた材料を整理し，伝え」る力があり，第２学年では特に重点

が置かれて指導が行われている。社会科では，物事の相互関係を学ぶことが多いが，実際に学んだことを生かして情報を発信し，それらに対して多くの人から評価を受ける機会は多くない。また，社会科で学んだことや，自身が相手に伝えたいことをまとめる際，実際に相手に伝わる言葉の表現力が求められるため，国語科の「話す」「書く」力に繋がるプロジェクトを企画した。

生徒の実態として，多くの情報を得る技術や，ICT 端末を用いる能力は教師よりも長けている部分が多い。しかし，得られた情報から，要点を抽出しまとめることや，誰でも読みやすい言葉に直すといった能力は十分ではない。さらに，インターネット上にある情報が全てであると感じている生徒も多く，インターネット上では扱われないような草の根的な情報から新しさを発見しようという態度は，希薄だともいえる。観光資源が豊かな石川県において，新たな魅力を発信しようとしたとき，既存の情報だけでは新しさが生まれにくいことにも，気付いて欲しいことから，社会科と国語科で連携をしてプロジェクトとして立ち上げることになった。

C．教科等横断的プロジェクト作成に当たって

国語科で育成したい資質能力の中には、「伝える対象によって伝え方を工夫する力」があり、第２学年では特に力点が置かれて指導が行われている。社会科では、物事の相互関係を学ぶことが多いが、実際に学んだことを生かして情報を発信し、それらに対して多くの人から評価を受ける機会は多くない。また、社会科で学んだことや、自身が相手に伝えたいことをまとめる際、実際に相手に伝わる言葉の表現力が求められるため、国語科の「話す」「書く」力に繋がるプロジェクトを企画した。

生徒の実態として、多くの情報を得る技術や、ICT 端末を用いる能力は教師よりも長けている部分が多い。しかし、得られた情報から、要点を抽出しまとめることや、誰でも読みやすい言葉に直すといった能力は未熟である。さらに、インターネット上にある情報が全てと感じている生徒も多く、インターネット上では扱われないような草の根的な情報から新しさを発見しようという態度は、希薄だともいえる。観光資源豊かな石川県において、新たな魅力を発信しようとした時、既存の情報だけでは新しさが生まれにくいことにも、気づいて欲しいことから、社会科と国語科で連携をしてプロジェクトとして立ち上げることになった。

３年生　「新聞の投書欄に投稿しよう」

A．プロジェクト内容

社会科公民的分野におけるプロジェクトである。政治参加には様々な方法が考えられるが，本実践においては新聞の投書欄に投稿することを通して，中学生にもできる政治参加を模索したいと考えている。これによって，よりよい社会を創り出そうとする STEAM 教育の実践につながると考えている。

B．社会科で身に付けさせたい資質・能力と各教科等との関連・連携

学習指導要領解説社会編の（２）民主政治と政治参加においては，「国民一人一人が政治に対する関心を高め，主権者であるという自覚を深め，主体的に政治に参画することについて多面的・多角的に考察，構想し，表現できるようにする」と記載されている。新聞の投書という手段からそのねらいへ迫れるのではないかと考えた。

C．教科等横断的プロジェクト作成に当たって

本実践においては，国語科との連携が考えられる。学習指導要領解説国語編で，社会科と共通する内容としては，第３学年の「書くこと」において次のようなことが述べられている。構成を考え

る際には「集めた材料の客観性や信頼性を確認し，伝えたいことを明確にする」こと，「多様な読み手を説得できるように」することや，「資料を適切に引用したりするなど」して記述することなどである。これらの点は社会科の見方・考え方にも共通して必要なものであり，様々な年代，立場の人の目に触れる新聞の投書欄への投稿に際して必要な点を網羅していると考えられる。

３．成果と課題

１年生　「祈りと願いの企画展」

（１）成果

成果は大きく分けて３点ある。

まずプロジェクト自体の立案について，身近な地域の歴史を調査する単元を，地域の課題とかかわらせてプロジェクト化できないだろうか，という考えがスタートであった。そこで，国民文化祭において学生にも意見を求めたり企画を進める旨を自治体が求める予定であるということを思い出し，企画展を作ってはどうかと考えた。そこで，美術科教員と現在の生徒の作品と地域に残る文化財を一緒に紹介するという案が出た。当時の文化財は何を狙い，どのような願いがあって生まれたのかを知ることは当時の様子，歴史的背景を知らなければならない。その文化財の願いと，生徒の自分自身の願いをリンクさせて紹介する企画展となった。博物館などにはキャプションがつきもので解説なしには文化財の価値も伝え難いことから，キャプションにまとめることを国語科教員と相談し，国語科とも連携を行うことに決まった。

したがって１点目はプロジェクトの立案は，思いつきや大まかな構想段階のものでも良いので，まず他教科の教員と話してみることが重要であると分かったことである。

２点目はプロジェクトの作成と進行ができたことである。美術科・国語科との授業の進度の連絡調整を行いながら，プロジェクトを進めた（図１参照）。課題意識を社会科での宗教や文化の下地と，身近な地域の調査での導入における課題意識から，プロジェクトをスタートすることができた。

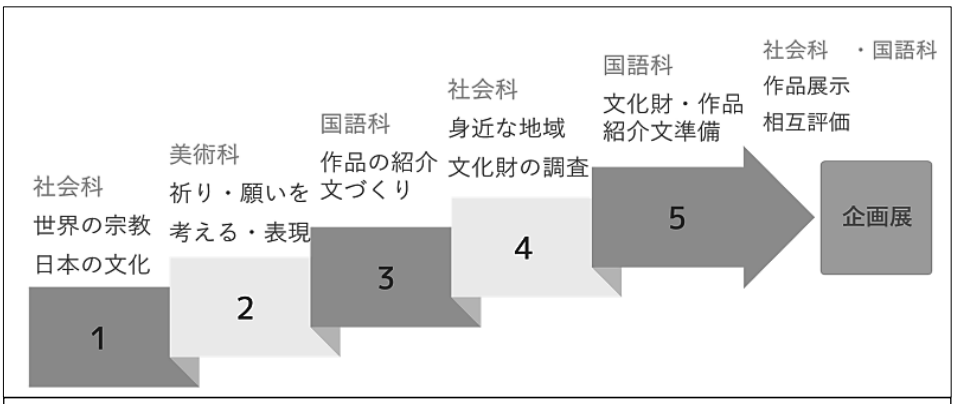


図１　「祈りと願いの企画展」フロー

３点目は，これらのプロジェクトを組んだ今年は昨年度よりも他教科とのつながりを感じている生徒が増加した。これは，このプロジェクトが社会科，美術科，国語科が関わっていると生徒が認識したことが関わっていると考えている。他教科の学びとのつながりを感じることは，教科の特性を学ぶことのみではなく，様々な価値を創造するために教科横断の学びを生み出す下地となるであろう。

（２）課題

課題はまず理科，技術科，数学科などの教科との連携が図れなかったことである。社会課題は

非常に多岐に渡り，その課題解決もさまざまである。その中で必要となる理科，数学，技術科の知識や技能は非常に高度なものとなる。課題の解決をプロジェクトに組み込むことは今回のプロジェクトでは非常に難易度が高かった。例えば，企画展での人々の動線，企画展を行う部屋の湿度温度管理，展示室のパーティション，などは考慮し得るところであるが，中学校の学習内容にはあてはまらないものなどもあるため，連携がとりにくかった。学校研究としても課題となると考えられる。

２年生　「15 秒で分かる石川県」

（１）成果

２年における実践では，『本校が定める Society5.0 を主体的に生きるための資質・能力』の中でも，特に次の３点について育成が行うことができたと考えている。

１点目は，「６　文章や情報を読み解く力」の育成である。過疎や過密のような人口問題は，教科書内では中国・四国地方の単元で学習する内容であり，日本の中でも局所的な問題のように捉えてしまう生徒も少なくない。身近な地域の課題を見つける過程で，多くの情報の中から，情報や文章を読み解き分析した。既習の内容と身近な地域の現状を照らし合わせ，人口問題を引き起こす根底となる条件や，石川県独自の特色などを考察することができた。

２点目は，「７　持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」の育成である。地方の都市や町が持続可能な町づくりを志向する上で，生産労働人口の流出が課題となっていることに気付き，どのような情報を発信することで県内への定住を促進することができるのかを考察できた。若者の定住を目的としたとき，現在中学生である自分が必要とする情報や，社会の若者たちにとって町が魅力的に映る情報とは何かを，グループで共有しながら活動を進めた。若者が抱く大都市への想いに共感する生徒が多く，その想いと対等になり得る情報とは何かを思案しながら活動に取り組む生徒の姿が見られた。

３点目は，「９　論理的思考」の育成である。どのような情報をホームページに掲載したら良いかを考える際に，テーマパークの招致など生徒の願望が含まれるグループが見られた。そこで，発信する情報の正しさや，目的に合致した内容なのかを検証する活動を通して，グループの取組を客観視する機会となった。石川県にしかない物に関する情報を発信することで，町の魅力を伝えられると考える生徒や，起業支援など各種補助に関わる情報を発信することで，仕事のしやすい町であることを発信できると考える生徒がいた。さらに，情報をまとめる作業の中で，自治体ごとの交通網の発達の偏りに気付き，石川県の新たな課題として考えを深めた生徒もおり，多面的・多角的な思考を発揮する場の設定ができたと考えられる。

（２）課題

本実践の課題は，２つあると考えられる。１つ目は，生徒同士で成果物の評価を行う視点の精選である。発表を聞く側の生徒には相互評価の視点として，①若者の興味をひく内容になっているか。②若者に住みたいと思わせる工夫がされているか。という２点を設定した。ホームページの作成にあたり，作ったホームページを閲覧してもらえる工夫と，生産労働人口の増加に効果的な情報の提供の２点が重要であると考えたためである。しかし，どこの都市であっても得られる環境や支援の情報だけでは，定住者を増やすことには繋がりにくい。地域の特色が踏まえられた独自性のあるホームページとなっている必要があると考えられる。成果物の相互評価をする際にも，発信された情報が，地域の特色を踏まえたものになっているかを再度検証する視点を設定

する必要があったと考えられる。

２つ目は，単元構成をするにあたり，時数を捻出するためには，より精緻なカリキュラムマネジメントが必要だと分かった。本実践を行う中で，生徒の興味の広がりや思考の深まりから，想定していた時数では足りなくなってしまうグループが出てきた。生徒の自由な探究を促すには，その他の単元構成の見直しをすることで，十分な時間を確保することが必要だと考えられる。

３年生　「新聞の投書欄に投稿しよう」

（１）成果

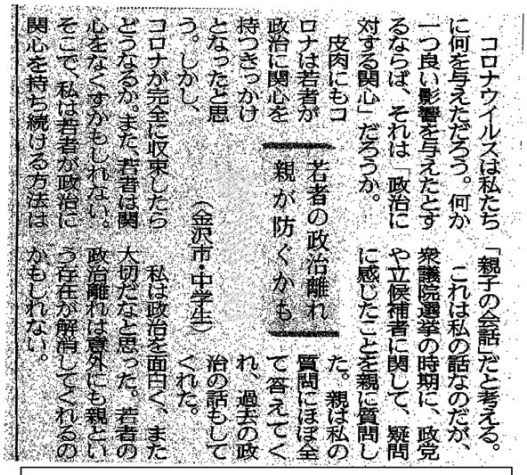
３年における実践では，『本校が定める Society5.0 を主体的に生きるための資質・能力』の中でも特に次の５点について育成を行うことができたと考えている。

３	よりよく生きようとする態度	（特に「理想の社会に向かおうとする態度」の部分）	
４	多様性の尊重	７	持続可能な社会を志向する倫理観・価値観
９	論理的思考	10	批判的思考

社会科の特性として，どうしても実社会にアウトプットするものを提案することが難しいという点がある。学習指導要領においても，社会科の目標が「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」となっている。学習指導要領解説においても，公民的分野の目標（２）には，次のように明記されている。

> （２）社会的事象の意味や意義，特色や相互の関連を<u>現代の社会生活と関連付けて多面的・多角的に考察したり，現代社会に見られる課題について公正に判断したりする力，思考・判断したことを説明したり，それらを 基に議論したりする力を養う。</u>

下線部の育成を図るため，国語科との連携を模索し，特に９の論理的思考と 10 の批判的思考を意識した。新聞の投書欄に投稿することを前提としているため，必然的に論理的思考が求められる。さらに書いたものを相互に読み合う活動を行ったことで，論理的思考だけでなく批判的思考の育成にもつながったと考えられる。国語科との連携を模索した実践ならではの成果であったと考えている。また，机上の空論的な投稿文ではなく，既習の効率と公正や実現可能性なども考慮された，現実的な方向から考えられた投稿文を書くことにもつながっていると考える。（資料１　2022 年２月１日　北國新聞）



コロナウイルスは私たち「親子の会話」だと考える。に何を与えただろう。何か　これは私の話なのだが、一つ良い影響を与えたとす衆議院選挙の時期に、政党るならば、それは「政治に　や立候補者に関して、疑問対する関心」だろうか。　に感じたことを親に質問し皮肉にもコ　た。親は私の

若者の政治離れ　親が防ぐかも

ロナは若者が　質問にほぼ全政治に関心を　て答えてくれ、過去の政持つきっかけ　治の話もしてとなったと思　くれた。う。しかし、コロナが完全に収束したら　私は政治を面白く、またどうなるか。また、若者は関　大切だなと思った。若者の心をなくすかもしれない。　政治離れは意外にも親こそこで、私は若者が政治に　う存在が解消してくれるの関心を持ち続ける方法は　かもしれない。

（金沢市・中学生）

資料１　2022 年２月１日北國新聞

本実践を通して『本校が定める Society5.0 を主体的に生きるための資質・能力』の３，４，７の部分も育成に寄与したと考えられる。特に４に関連して，親戚に外国籍の方がいるという内容から，多様性の尊重や国際協調の必要性を論じる投稿文を書いた生徒が複数見られた。また，３や７に関連して，生徒にとっての，意見というものの幅が広がったように思う。生徒の目線では，意見とは批判的な視点で論じることのみを指すような雰囲気があったように思う。

しかし実際の政治参加においては，自身の意見に照らして共感，支持できる政党や候補者に投票するケースがあるのと同様に，批判だけが意見表明ではない。実際に生徒が書いたものの中にも，政治と行政の違いを理解したうえで，観光政策や公共施設の運営の在り方などに関連して，それらを肯定的に評価する趣旨の投稿文がいくつも見

られた。本実践の中で，社会科での既習と国語科の見方・考え方が連携することで，よりよい投稿文を書くことにつながっていたように思う。

（２）課題

本実践においての課題として，意見文を書く活動に関しては２時間のみであったことである。本来は時間をおいて，生徒の書いた投稿文が実際に新聞に掲載されたものを用いたり，継続的に投書欄を読むことで類似の意見や別の方向から論じられたものを用いたりすることによって，より考えが深まると期待される。しかし進度の面で，そこまで時間的余裕をもって実践を深めることができなかった。本実践については政治参加の視点に限っていたが，実践を繰り返すことによって経済や国際などほかの分野においても投稿できるものであり，ひいては生徒自らが継続的に投稿を続けていくことのできるものでもある。しかし，そこに至るまで深めさせることができず，継続性のない実践にとどまってしまったことが大きな課題である

本校社会科として

（１）成果

１点目は上記のように，教科等横断的に歴史・地理・公民全分野で他教科と連携してプロジェクトを組み，現実社会の課題解決を行う学習ができたことである。

２点目は社会科の特性（実社会の課題を社会科の見方・考え方を使い学ぶこと）から果たすべき役割が課題把握フェーズを重点的に行うことで他教科の学びにつなげやすいが，他のフェーズでも他教科との話し合いとプロジェクトによっては関われることが分かった。（下図２参照）

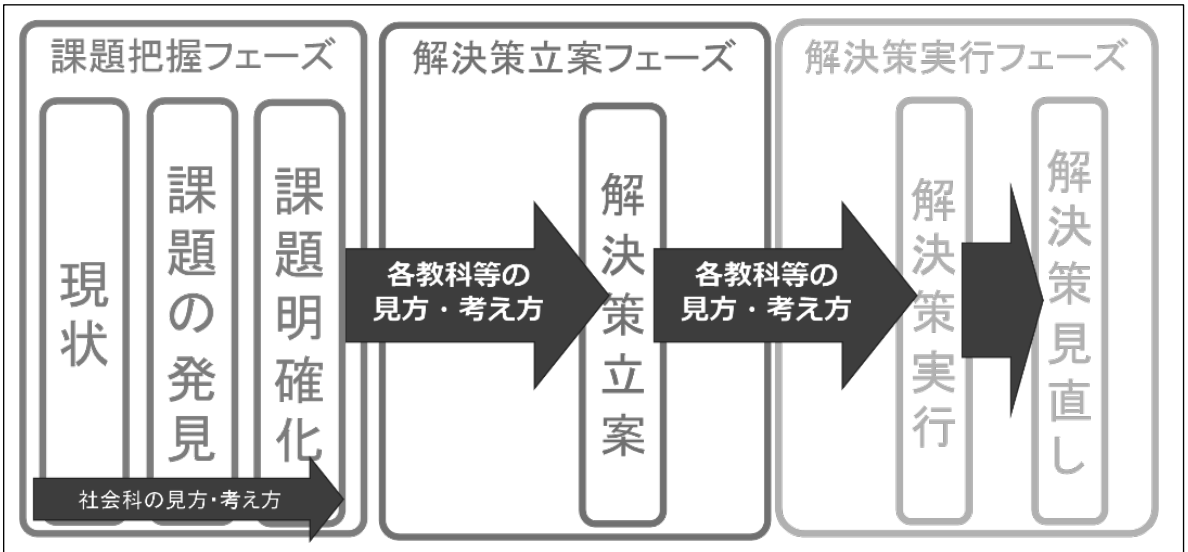


図２　課題解決学習の段階と重視すべき社会科の役割

３点目は昨年度からの実践で生徒にとって「社会科」は実際の社会に必要な学習と捉えられ，複数の教科と結び付く教科と感じられていることである。

全教科等に関するアンケートを全校生徒に実施したところ，「実社会とつながりがあると感じる教科はありますか」の質問に対して，2020 年度は 79%の生徒が社会科を挙げていたが，2021 年度では 93.9%の生徒が社会科を挙げている。また，「学んだ知識や技能、考え方が、実社会で役に立つと感じる教科はありますか」の質問に対して社会科と答えた生徒は 2020 年度は 61%，2021 は 84.2%，「複数の教科の知識や技能、考え方が含まれており、学びが深まったと感じる教科の授業はありましたか」に対して社会科と答えた生徒は 2020 年度が 49%，2021 年度は 75.1%

とすべての質問に関して大幅に上昇した。

これは本校研究の「複数の STEAM 領域の知識と技能や見方・考え方を働かせて，現実社会の課題を解決する学習」を行い，教科は分断されたものという考えが薄れ，課題の解決には各教科等を融合・統合した学びや考え方を使う必要があるという姿勢の下地にもなると考える。

（２）課題

社会科でのプロジェクトにおいて，今回の実践では継続性に課題があった。

２年生でも３年生でも生徒の相互評価を行うことで論理的思考や批判的思考の育成に寄与したと考えられるが，これには継続性が必要である。今後プロジェクトと別にして，一貫して行うことが課題である。

また，複数の学年の課題でも出たことだが，課題は社会科の学習の進度と他教科の進度の調整である。プロジェクトになり得る実践を組み，いつどの段階で行うと，他教科と連携が図りやすいか各教科の進度表と見比べて，カリキュラムマネジメントを行う必要がある。昨年度の実践と今年度，さらに来年度を実践を積み上げていくことで，この課題を解決していきたい。

さらに，プロジェクト自体の STEAM 化が十分かどうかも課題である。今年度は STEAM 領域の A や T 領域以外とのプロジェクトを十分に行うことができたとは言えない。次年度のプロジェクトでは理科や数学科，技術科などとの連携が必要である。

４．参考文献

1)内閣府：第５次科学技術基本計画，pp.10-11(2016)

2)経済産業省・厚生労働省・文部科学省：「2016 年版ものづくり白書」，pp.112-116(2016)

3)吉村 隆：「第 8 回産業構造審議会産業技術環境分科会研究開発・イノベーション小委員会資料」，pp.6-10(2019)

4)安宅　和人：「シン・ニホン」，株式会社ニューズピックス

5)楠見　孝：良き市民のための批判的思考　特集「批判的思考と心理学」，心理学ワールド，No.61, 5-8. (2013)

１年　単元名「身近な地域の歴史」　プロジェクト名「祈りと願いの企画展」
単元計画（５時間扱い）本時は５時間目

次	時	学習内容・ねらい（■） 主な活動等（丸数字）	評価規準（〇）３観点【　】 指導上の留意点（・）	本校が定める Society5.0 を主体的に生きるための資質・能力
1	1	■ 身近な地域への興味関心を高め，身近な地域の歴史的文化的遺産を探す。 ① 身近な地域にどのような文化財があるか調べる。 ② 歴史的・文化的遺産を基に問いを設定する。	・ 国民文化祭の企画として考えることを伝える。 ・ 教科書の事例を参考に身近な地域の文化財の背景を探っていくことを伝える。 ・ 問いは作成者の意図と関連づけて調査していくように促す。 〇 身近な地域の歴史や伝統・文化に関心を持ち，そこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。【態】	
	2	■ 文化財の背景を調査する。 ① 歴史的文化的遺産にある作成者の意図や時代背景を探る。 ② 設定した問いの予想を立て，調査を行う。	〇 適切に情報を集め，調査の仕方を身につけている。【知】	「文章や情報を読み解く力」
	3	■ 調査活動を行う。 ① 本当に正しい情報かどうか確認しながら，調査を行う。 ② 情報の出典を確認し使う情報を検討する。	〇 適切に情報を集め，調査の仕方を身につけている。【知】	「文章や情報を読み解く力」
	4	■ 調査活動を行う。 ① 設定した文化財と同じ時代の代表的な文化財とを比較し，背景の違いや共通点を調査する。	〇 調査を通して分かった事柄を適切な項目を立てて整理し，図や年表などにまとめている。【知】	「文章や情報を読み解く力」 「論理的思考」
	5 本時	■ 企画展で紹介する文化財に関する「問い」の情報をまとめ，整理する。 ① 問いへの答えをまとめる。 ② グループで発表し相互評価を行う。	〇 調査を通して分かったこと，分からなかったことや疑問などを日本の歴史の大きな流れと結び付けて考察し，根拠を基に適切に表現している。【思】	「文章や情報を読み解く力」 「論理的思考」
	後日	■ 文化財と作品を解説文とともに企画展に展示する。 ① 展示をブースに分けて，展示方法を考えさせる。 ② 展示を鑑賞する人がどのような気づき・発見があったか鑑賞記録から振り返る。		

実践事例

教科名「社会科」・学年「１年」

授業者	岡田　哲典	授業クラス	１年１組～４組

プロジェクト名	教科等横断を図る教科等名と内容
祈りと願いの企画展	美術科「祈りと願いの造形」 国語科「制作した作品の解説文を書こう」

Society5.0を主体的に生きるための資質・能力	教科等で身に付けたい資質・能力
「文章や情報を読み解く力」 「論理的思考」	調査を通してわかったこと，わからなかったことや疑問などを日本の歴史の大きな流れと結び付けて考察し，根拠を基に適切に表現している。【思考・判断・表現】 身近な地域の歴史や伝統・文化に関心を持ち，そこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】

STEAM教育の視点

- 身近な地域の歴史を調査する上で，文化財に視点をあてて，その文化財が生まれるきっかけや残されてきた意味とそれらの社会的背景を考え，「祈りと願い」を読み取り，それを企画展にするという学習を行う。
- 美術科で自らの作品を作り，祈りや願いを表現することで，文化財の背景や作者の思いをより理解・共感させ，展示を見る人にどのように伝えていくか考えさせることで，社会科の見方・考え方も深めさせたい。

本時の授業のねらい

企画展で紹介する文化財に関する「問い」の情報をまとめ，整理し適切な表現をする。

授業の流れ・活動等	時間
１．文化財に関する「問い」の調査で分かったことを確認する。 ２．本時の目標の確認をする。 企画展で紹介する文化財に関する「問い」の情報をまとめ，整理し適切な表現をする。	5
３．伝える情報の精選を行う。 ・設定した「問い」に対して調べた情報をまとめ，展示するうえで文化財の作られた経緯や作者の思い，残されてきた意図などを主軸にして伝えたい情報を推敲する。	20
４．発表を行い，助言し合う。 ・グループ内で発表を行い，相互評価を行い，助言をする。	20
５．ここまでの学習を振り返る。 ・どのような文化財を調べ，問いを持ち，文化財の製作者の思いや背景を知ったか，その上でどのようなことに気付いたか，振り返り，国語科での展示解説文作成につなげる。	5

２年　単元名「身近な地域の調査」プロジェクト名「15 秒で分かる石川県」
単元計画（５時間扱い）本時は５時間目

次	時	学習内容・ねらい（■） 主な活動等（丸数字）	評価規準（〇）３観点【　】 指導上の留意点（・）	本校が定める Society5.0 を主体的に生きるための資質・能力
1	1	■石川県の人口には，どのような特色があり，課題があると考えられるか分析する。 ① 各市町村や県の発行している人口動態を基に，石川県の人口の傾向を読み取る。 ② 読み取った傾向から，石川県が抱えている課題を考察する。	〇地域の実態や課題解決のための取組を理解している。【知】	「文章や情報を読み解く力」
	2	■石川県や各市町村が，人口問題にどのように取り組んでいるのか調べる。 ① グループで石川県や各市町村が行っている政策や取組を調べる。 ② 若者（15～22 歳）の転入増加に向けて，どのような発信が必要か考える。	・生産労働人口と年少人口の減少から，「定住」や「移住」が課題であることを明確にする。	「論理的思考」
	3 ～ 4	■石川県の人口に関わる課題解決に向けて，重要な事象を分かりやすくまとめ，表現することができる。 ① 志賀町の公式サイトを手本に，若者に向けて発信するトピックスを考える。 ② スライドを用いて，テーマ毎に分かりやすく内容をまとめる。 ③ グループ毎に一つのファイルにスライドショーのリンクを集約する。	〇地域の在り方を，持続可能性や地域の変容などに着目し，どのような発信が効果的なのか，多面的に考察している。【思】 〇地域の在り方について，より良い社会の実現を視野に，石川県における課題を主体的に追究，解決しようとしている。【態】	「論理的思考」
	5 本 時	■調査結果と分析を分かりやすくまとめ発表し，より良い地域の将来像を考える。 ① 他の班の作成したページを鑑賞する。 ② ドキュメントに感想や意見をコメントとして残して，相互評価を行う。	〇地域の特色や取組を踏まえて，どのような情報を発信することが若者にとって必要となるのか発表することができる。【思】	「持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」

実践事例

教科名「社会科」・学年「２年」

授業者	大塚　有将	授業クラス	２年１組～４組

プロジェクト名	教科等横断を図る教科等名と内容
15秒で分かる石川県	国語科「広告を作ろう」

Society5.0を主体的に生きるための資質・能力	教科等で身に付けたい資質・能力
「持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」	地域の特色や取組を踏まえて，どのような情報を発信することが若者にとって必要となるのか発表することができる。 【思考・判断・表現】 地域の在り方について，より良い社会の実現を視野に，石川県における課題を主体的に追究，解決しようとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】

STEAM教育の視点

身近な地域の地理の調査をする上で，石川県の人口問題に着目し，問題に対する自治体の取組や，魅力を発見する学習を行う。

石川県の人口に占める若者の人口の減少を問題として捉え，中学生や高校生などの若者に向けた情報を作成する。受け手によって，適した情報を選び，まとめる力を身に付けさせたい。国語科では，石川県を紹介する動画を15秒間という短い時間に設定することで，情報を発信する目的と分かりやすさの両方を備えた表現を学ぶ。また，グループで活動に取り組むことで，石川県の地域的な特色を多面的に捉え，発信できるようにしたい。

本時の授業のねらい

調査結果と分析を分かりやすくまとめ発表し，より良い地域の将来像を考える。

授業の流れ・活動等	時間
課題：より良い石川県を実現するために，若者達に発信すべきことをまとめ，発表しよう	
１．作成したホームページのドキュメントファイルを交流する。 ・どのような工夫をしたのか，なぜそのテーマを選んだのか，の二点からグループで発表する。	30
２．発表を聞いている生徒は，相互評価シートを用いて，感想や満足度を評価する。 相互評価する項目 ・分かりやすい製作物，内容になっていたか。 ・石川県に住み続けたい，戻ってきたいと思わせる工夫はなされていたか。	
３．発表終了後，クラウド内で製作物を共有し，生徒自身の感想を残し感想の共有を行う。	15
４．ホームページの内容をより強く印象付けるために，15秒で紹介できるようにしていくことを説明し，見通しを持たせる。	5

３年　単元名「現代の民主政治」プロジェクト名「新聞の投書欄に投稿しよう」

単元計画（５時間扱い）本時は５時間目

次	時	学習内容・ねらい（■） 主な活動等（丸数字）	評価規準（○）３観点【　】 指導上の留意点（・）	本校が定める Society5.0 を主体的に生きるための資質・能力
1	1	■民主主義を実現するための方法や，選挙制度などについて調べる。 ①選挙の基本原則について調べる。 ②日本で行われている選挙制度について調べ，制度によって当選者が変化することに気付く。	・秘密選挙については生徒会役員選挙も参考に調べ，考えさせる。 ・複数の選挙制度を組み合わせて実施していることの意味を考えられるようにする。 ○民主主義や選挙制度について調べ，まとめることができている。【知】	「多様性の尊重」
	2	■政党の役割について考察する。 ①よいコンビニの条件を考え，発表した後で，好きなコンビニについて問う。 ②よいコンビニの条件よりも好きなコンビニの方が答えやすいように，よい政治よりも支持する政党の方が答えやすいことに気付く。 ③ボートマッチ(政党との相性診断)を行い，出た結果について話し合う。	・以前の創造デザイン科での学習内容，「よい休日の過ごし方とは？」,「よい高校とはどんな高校？」で考察したこととも関連付けて行う。 ・ボートマッチを使うことで，自身の意見が政党の意見にもつながっていることを体感する。 ○ボートマッチに意欲的に取り組み，意見を述べたり話し合ったりしている。【態】	「対話する力」 「論理的思考」 「批判する力」
	3	■マスメディアや世論が果たす役割について考察する。 ①新聞の見出しの読み比べを行う。 ②世論を集約する形でマスメディアごとに論調の違いがあることに気付く。	・肯定的か批判的かなどの，読み取る視点を示す。 ○資料を基に，マスメディアの論調に違いがあることに気付くことができる。【思】	「論理的思考」 「批判する力」
	4	■現代の日本の選挙の課題について考察する。 ①棄権の増加(投票率の低下)について考察する。 ②一票の格差問題(選挙区ごとの当選者の得票数に差がある)について考察する。	・棄権の増加，一票の格差問題ともに，資料を基に考えられるようにする。 ○資料を基に，日本の選挙の課題について考察することができている。【思】	「論理的思考」 「批判する力」
	5 本時	■新聞の投書欄に投稿する文章を考えることを通して，政治参加を目指す。 ①中学生を中心に，実際に投稿・掲載された事例を読む。 ②新聞の投書欄に投稿する文章を書く。	・国語科で学んだこと(「多角的に分析して書こう」)を生かすようにする。 ・タブレット端末を用いて，必要に応じて調べながら作成する。 ○必要に応じて適切に資料を活用しながら，投書欄に投稿する文章を書くことができる。【思】	「持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」 「論理的思考」
	6 後日	■前時に書いた文章を相互に読み合うことで，投稿できる状態に完成させる。 ①新聞の投書欄に投稿する文章を読み合い，必要に応じて修正を行う。	・国語科で学んだこと(「多角的に分析して書こう」)を生かすようにする。 ・根拠が明確か，多くの人の目に触れる文章として適切か，伝わるものになっているかといった視点で読み合う。 ○必要に応じて適切に資料を活用しながら，投書欄に投稿する文章を書くことができる。【思】	「持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」 「論理的思考」 「批判的思考」

実践事例

教科名「社会科」・学年「３年」

授業者	金田　哲也	授業日	１１月 １１日（木）	授業クラス （限目）	３年１組～４組 （１限～４限）

プロジェクト名	教科等横断を図る教科等名と内容
新聞の投書欄に投稿しよう	国語科「多角的に分析して書こう」

Society5.0を主体的に生きるための資質・能力	教科等で身に付けたい資質・能力
「持続可能な社会を志向する倫理観・価値観」 「論理的思考」	必要に応じて適切に資料を活用しながら、投書欄に投稿する文章を書くことができる。【思考・判断・表現】

STEAM教育の視点

中学生にもできる政治参加の方法の一つとして、意見を表明することが挙げられる。「国や地方公共団体に意見を伝えることも政治参加です。」、「政治家に自分の意見を伝えたりすることも、新しい政治参加の方法として広がっています。」との記述が教科書（『新しい社会　公民』東京書籍）にも記載されている。そこで本時では国語科において育成される思考力・判断力・表現力の中でも、Bの「書くこと」の指導によって育成される資質・能力を活用して、新聞の投書欄に投稿することで自身の考えを世に問うことをプロジェクトとして行う。社会の動きや状況などに関心を持ち、それに対して自身の意見を持ち、投書欄への投稿という形で発信することによって、Society5.0を主体的に生きるためのための資質・能力を育成することにつながると考えている。

本時の授業のねらい

必要に応じて適切に資料を活用しながら、投書欄に投稿する文章を書くことができる。

授業の流れ・活動等	時間
１．前時までの学習を振り返る。（政治参加の方法について）	５
２．本時の学習課題と、学習内容や活動の提示　実際の掲載例も示す	１０
課題 新聞の投書欄に投稿する意見文を書こう。	
条件　・政治参加につながる(関連する)もので、自身の意見を表明するものであること ・各新聞社の規定(400字程度、二重投稿禁止)に沿うものであること ・国語科の時間に学んだ、「多角的に分析して書こう」での内容も活用する ・タブレット端末で書く　必要に応じて調べることも可	
そのほか住所、氏名、学校名、電話番号、掲載を希望する新聞を明記	
３．投稿するための意見文を書く	３０
４．まとめと振り返り。 ・後日まとめて、各新聞社に送る。 ・次回は、書いたものを通してお互いに交流することで、よりよいものにする。	５